石仏あれこれ

シリーズA 石仏を訪ねる

A2 坂本・慈眼堂 I　1976

森隆一

慈眼堂参道

A2. 坂本・慈眼堂 Ⅰ　1976

‘石仏を撮る’と意識して写真を撮りに行ったのは一乗谷・西山光照寺跡が最初であったと思ってきたが、アルバムを見ていると慈眼堂が先で、秩父・金昌寺を挟んで西山光照寺跡を訪れたようだ。45 年程昔のことである。西山光照寺跡のほうが印象が強かったことによると考えている。アルバムからは、1976 年に秩父 金昌寺も訪れている。これら 3 カ寺を訪れる過程で石仏を写真の第一の対象とすることになった。

有名寺院で石仏にはお目にかかることはあまりない。知恩寺のように墓地に置かれていることはありえるがそれほど多くはない。有名な寺院は、東大寺のような官製のもの、平等院のような貴族の氏寺あるいは別邸的なものがある。江戸時代には、藩主の菩提寺と寺請制度による旦那寺がある。旦那寺には檀家の墓地を建造するのだが、田舎では、宅地や田畑の周辺に造ることも行われた。

市中の寺の墓地は狭く。治安を考えての事であろうが、気安くは入れないようになっている。探訪は、清水 俊明の四部作、大和の石仏 1973・近江の石仏 1976・京都の石仏 1977・大阪の石仏 1978 に頼ることになった。この中で簡単に行けそうな慈眼堂にとりあえず行ってみたようである。

この 3 カ寺は再訪することになるが、ここでは、石仏を写真の主目標とする契機となったということで、1976 年に撮ったものを取り挙げること

にする。

慈眼堂に話を戻す。1975 年までに所蔵していた近畿地方の石仏に関する本は、清水 俊明著、創元社刊行の

「大和の石仏」1973、「近江の石仏」1976

である。奈良は遠いことと行き易い所は既に訪れていた。近江の石仏を眺めていて、行き易く石仏群があるところとして、寺の由来などは知らずに慈眼堂を選び、出かけた。。三条京阪から浜大津乗り換えで小一時間で坂本駅に着く。

駅から徒歩でいくことになる。坂本駅の前の県道 316 号線を比叡山(日吉大社)のほうに、ケーブル坂本駅を目指し登っていく。すぐの道を左折したところに‘鶴乭そば’があるが、当時はソバには興味がなかった。石鳥居を過ぎ、さらに、日吉大社の朱色の鳥居を右に見て南下すると右手に比叡山高校とその南にケーブル坂本駅の入り口がある。少し南のＴ字路を曲がり、少し(琵琶湖のほうに)下がる。入り口はわかりにくく天台宗務庁は行き過ぎである。この辺りは千年を超え、信長に抵抗した大教団の本拠地としての風格がある。

湖西地方は比良山系の裾野と言え、殆ど起伏が無く琵琶湖へと下がっていく。また、琵琶湖から水が流れ出るのは、瀬田川と琵琶湖疎水のみである。道に迷った場合は、低い方向あるいは水の流れる方向に進めば、湖北

の一部を除き、手前にある国道を越えて、琵琶湖に行きつくことになる。さらに、湖西では湖西線が平野部は高架で走っていて、これも目安になる。

慈眼堂について調べてみた

Wikipedia「慈眼堂（大津市）」

慶長 12 年(1607 年)から比叡山南光坊に住み、織田信長の比叡山焼き討ち後の延暦寺の復興に尽力した天海の廟所である。江戸時代初期の禅宗様を基本とする仏堂で、正保 3 年(1646 年)に建立された。正面三間、側面三間、一重、宝形造、桟瓦葺の建物である。建物は国の重要文化財に指定されている。堂内には木造慈眼大師坐像(重要文化財)が祀られていた(現在は延暦寺国宝殿にある)。境内には天海によって高島市から当地に移された鵜川四十八体石仏群のうちの 13 体の阿弥陀如来坐像のほか、歴代天台座主の墓、桓武天皇の御骨塔などがある。

滋賀県のホームページ「延暦寺慈眼堂」

堂の建立からあまり時を経ず整備された、釣燈籠や石燈籠などが堂と一連の存在となって独特の廟所景観を形成しており、その点でも高く評価できる。

天海が 13 体を移した経緯や伝承は見つけられなかった。

参道の奥には下・左のような門が見える。門を入った左手にある小さい扉をくぐると下・右のように石燈篭の列とお堂が目に飛び込んでくる。こ

のお堂が天海の廟であろう。

石燈篭の写真を掲げる。

通常の石燈篭に比べて、傘の部分が大きく独特な感じで優雅である。石燈篭に美しいという形容詞は用いたことはないがこれは美しい石燈篭といえる。

この左手の 2m ほどの石垣の上に目当ての阿弥陀如来仏群が置かれている。

石垣と石燈篭の間は墓石が並べられている。

これらの墓石は僧侶用のものである。設置された場所から、慈眼堂の住職のものと思われるが。それにしては数が多い気がする。ちなみに、Wikipedia「天海」から、天海の没年は 1643 年であり、380 年程前である。ここに、面白い記事があった。

天海は生前に日本での一切経(大蔵経)の印刷と出版を企図。慶安元年(1648 年)には、天海が着手した‘寛永寺版(天海版)）大蔵経’が、幕府の支援により完成した。天海によるこれらの経典の出版は日本の印刷文化史上、最も重要な業績の一つと言われている。天海が作製させた膨大な木製活字(天海版木活字)は 26 万個以上が現存している。

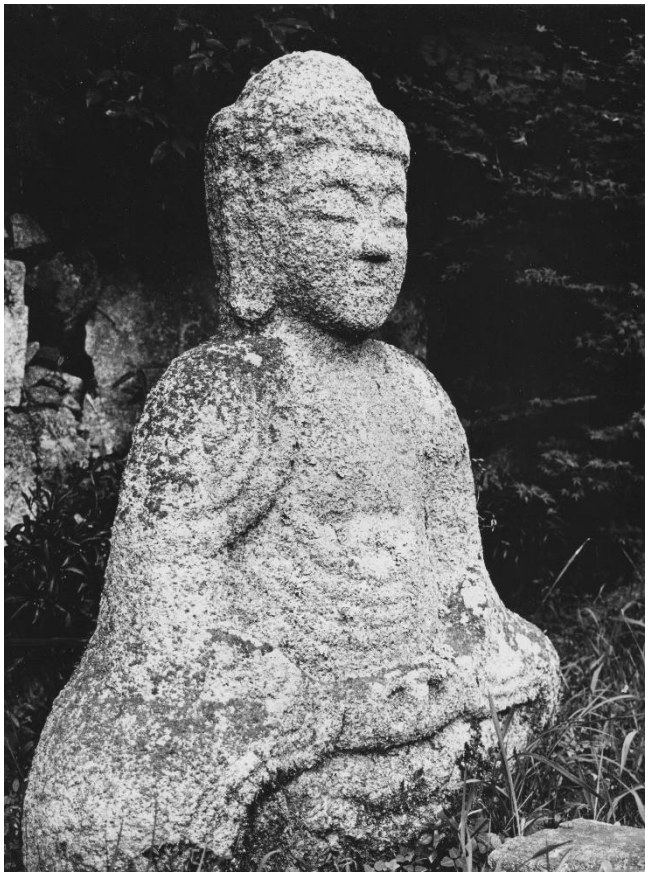
阿弥陀如来仏群の前の通路と最近の状況を Wikipedia から借用する。

Wikipedia「慈眼堂（大津市)」より

雑草対策であろうが、最近よく見られる透水性のコンクリートで舗装されている。

今でもうまく使えない広角レンズを使わなければ全身の写真を撮ることは難しい。こんなこともあり、石燈篭のほうが印象が強かった。

次は。この時撮った写真の幾つかである。撮影時の経緯は記憶になく、コメントを思いつかない、今思うと、プロマイド的な写真である。考えてみれば、この時まで見た人物写真は雑誌のグラビアであり、これがベースになっていると思われる。



あとがき

1970 年代は本をガイドとしては本しかなかった。Web 環境が整うのは Windows95 が普及した後である。この頃の話、本誌の編集者である福島勝彦による「わがデジタル創世記」から窺える。2000 年頃から、Google Map と Street View から、行き方が簡単にわかり、関連する Web site から何があるかがわかるようになったが、探し歩くという面白さはなくなった。最近では、見てきたように書く能力があれば、これらから訪問記を書けるのではないかと思われるほどである。

湖西に出かけたのはこれがほぼ初めてであった。‘ほぼ’を付けたことを述べよう。

大学生の頃、アベベがびわ湖毎日マラソン出場するというので、皇子山競技場に出かけた。入学の年とおもっていたが、アベベが優勝したのは、1965 年 5 月 9 日開催の第 20 回であった。スタートが終わった後、2 時間余りをどうしようかと歩いているうちに、上津役鉄道の駅にたどり着いた。たまたまへ行ってきた列車が客車が寄せ集めの 3 両で面白そうなので、飛び乗った。堅田まで往復して帰ってきたときには、マラソンは終わっていた。ということで、トランジット的に訪れた。なお、江若鉄道は 1969 年 11 月 1 日に廃止となり、1974 年 7 月 20 日に湖西線が開業した。